２００５年度

新潟大学国際センター
年報

Annual Report
of Niigata University
International Exchange Support Center
2005

Niigata University
international exchange
support
center

宮田　春夫

研究テーマ：環境と開発に関する南北関係

多様な主体が多様な役割を果たす複合的相互依存の国際社会において、環境と開発のための南北関係はどうあるべきか、全地球的レベルから地域共同体レベルまで、また、多国間協力、二国間協力を包括的に捉えて、政策のあり方を探っていきたいと考えています。

また、教育においては、理論と現実の両方を見ることにより、理論を現実に即して理解すること、また、対応を理論に基づきつつ現実に即したものとすることができる学生を育てたいと考えています。

所属学会：国際開発学会、環境科学会、International Studies Association

新潟大学ウェブサイトの研究者総覧のページ：

http://researchers.adm.niigata-u.ac.jp/public/MIYATAHaruo_a.html

1.授業

「教養教育に関する科目」（16年度までの「全学共通科目」）及び課題別副専攻「平和学」の授業のほか、農学部、理学部及び法学研究科の授業も担当しました。

2003年12月の採用後、平成17年度は実質的に初めて一般の授業を行う学年でした。その関係で、16 年度に分担者として途中参加した農学部の科目、「留学生と日本の国際化」及び「経済社会と環境問題」を除くと、事実上新規開講です。開講科目内容、効率等にまだ不十分な点があるので、18年度、19年度と、２年程度かけて改善する予定です。

授業内容を下記５のウェブサイトに掲載しています。

17年度には、学外非常勤講師は行っていません。

本学における担当授業一覧

開講期	授業科目名	備考
春	Environmental issues in Japan: History of Environmental Problems and Development of Policies	教養教育に関する科目。短期交換留学生用開講科目、課題別副専攻「環境学」科目としても指定。 明治から現在に至る日本の環境問題の歴史と政策の展開。
	Introduction to the North-South Relations for the Environment and Development	教養教育に関する科目。短期交換留学生用開講科目、課題別副専攻「環境学」科目、課題別副専攻「平和学」科目としても指定。 環境と開発を巡る南北関係に関わる諸課題と政策のあり方。大学院レベルの内容を、学部生向けの評価方法にして開講。
	国際開発協力演習 （環境と開発）	課題別副専攻「平和学」科目。 開発援助と環境の事例について、政府、非政府の援助関係者から直接話を聞く機会をも取り入れて、意図通りまたは真にそれを必要としている人に届く援助の難しさという現実を直視した上で、積極的に評価できる面を評価し、そうでない面についてはどのようにしたら改善できるのかを学生が考える機会を提供。JICAの人に来て頂いて話を聞く機会も設けた。

	留学生と日本の国際化	教養教育に関する科目。国際センター教員分担のうちの２コマ。 国際関係論の複合的相互依存論を基礎に、「多様なアクターの役割」をテーマに。
	自然環境関連法規	農学部。複数教員分担のうちの条約等に関する２コマ。
秋	Environmental issues in Japan: History of Environmental Problems and Development of Policies	春学期とほぼ同じ。
	Introduction to North-South Relations for the Environment and Development	春学期とほぼ同じ。
	North-South Relations for the Environment and Development	法学研究科。環境と開発を巡る南北関係に関わる諸課題と政策のあり方。
	環境社会科学 （環境政策論）	理学部環境科学科専門科目。 明治から現在に至る日本の環境問題の歴史と政策の展開。背景の社会情勢等を詳しく論じる Environmental issues in Japan よりも政策課題を詳しく論じることに重点。
	留学生と日本の国際化	春学期とほぼ同じ。
	環境問題と経済社会	教養教育に関する科目。課題別副専攻「環境学」指定科目。全学の複数教員分担のうちの２コマ。 「持続可能な開発とは何か」及び「地球環境問題とは何か」について、国際関係論及び環境政策論の面から。
集中講義	開発途上国の環境と開発：事例研究	教養教育に関する科目。課題別副専攻「平和学」指定科目。一種の集中講義として、９月の２週間のマダガスカル現地調査を中心に開講。国際化教育に関する調査研究の一環として、国際センターが経費を負担。 一つの開発途上国（今回はマダガスカル）を選択し、その国の環境問題、環境政策及び開発諸課題について事前に調査し、その上で、現地の問題の現場、政府機関、国際機関及び民間団体等を訪問して、実情を調査し、帰国後、それをそれぞれの学生が報告書にとりまとめ。

その他、後期から春休みにかけての木曜日５限に、開発途上国の開発問題に関心のある学部生・大学院生のための「development」概念勉強会を主宰しました。2006 年度には課題別副専攻「平和学」の科目「国際開発協力論：「開発」概念」として正式開講します。

2. 著作

区分	表題等	出版社等
講演要旨	For "Our Common Future", 2005 Global Youth Exchange Program: Toward a New Paradigm for the World, Intensive Discussion Session in Niigata 18 July 2005, 4 pp.	外務省
報告	新潟大学教養科目「開発途上国の環境と開発：事例研究」の事例、「大学教育における海外体験学習研究会」第２回全国大会プログラム発表要旨集、pp. 73-82、2005 年 10 月	大学教育における海外体験学習研究会、恵泉女学園大学
論文	開発途上国と地球的“環境”条約：1990 年代終わりに大きく変わった地球的レベルの“環境”条約、望月克哉（編）『国際環境レジームと発展途上国』調査研究報告書、pp. 1-38、2006 年３月	アジア経済研究所
報告	2005 年度「開発途上国の環境と開発：事例研究」報告書*、2006 年３月	新潟大学国際センター

＊ この年報の原稿作成時点では未完成のため、表題等が多少変わる可能性があります。

3. 講演等

日、場所	講演題目	主催者等
７月 18 日、新潟市内「朱鷺メッセ」	演題: For "Our Common Future" 外務省が「グローバル・ユース・イクスチェンジ・プログラム」により招請した開発途上国等の次世代の指導者たち（23－35 歳）に対する講義。「失敗国家」との見方は正しくなく、「国民」作りが未達成であると見るべきこと、「開発」の概念は幅広くかつ国や地域によって多様であること、アナーキーな国際社会において、環境と開発ばかりでなく、南北、現在の世代と将来の世代、富める者と貧しい者の関係を包含する持続可能な開発の概念、国際的な意思決定おける正義、国際決定事項の実施における大国の責任、多様なアクターの役割等が重要であることを論説。 この講演等についての外務省ウェブサイト： http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/hito/gye/gye_12.html	外務省
９月 23 日、マダガスカル国連広報センター図書室	Environmental issues in Japan: History of Environmental Problems and Development of Policies 国立アンタナナリボ大学の学生等に対し、過去の公害被害の教訓、1980 年代後半以降の国際関係、現在の環境負荷の小さい社会作りの模索等を紹介。	マダガスカル・ガールスカウト連盟
12 月 18 日、新潟市内「クロスパルにいがた」	新潟大学教養科目「開発途上国の環境と開発：事例研究」報告 新潟マダガスカル友の会報告会において、アフリカ及びマダガスカルについて紹介するとともに、マダガスカルを訪問した授業「開発途上国の環境と開発：事例研究」の結果について、市民向けに報告。なお、履修した学生たちも報告。悪天候で公共交通機関が運休等となったために参加者は少数に留まったが、もう一度報告会を開きたいとの声が出るなど、大変好評であった。	新潟マダガスカル友の会

その他：2006 年３月、新潟マダガスカル友の会理事・代表就任。

4.パイロット授業として国際センターの予算により実施した教養に関する科目「開発途上国の環境と開発：事例研究」の意義

開発途上国と先進国との関係についての政策課題を効果的に理解させる上で、開発途上国についての学生の具体的な理解が欠かせません。そこで、初めての試みとして、この科目を開講し、２週間の日程で、主にマダガスカルにおいて農村、政府機関、国際機関、NGO、青年海外協力隊、国立公園まで幅広く訪問して、実情を見るとともに、関係者の説明を得る授業を行いました。

但し、一般の「教養教育に関する科目」からの経費の配分が無いため、センター教員会議にお願いして、国際センターの任務のうちの「国際連携、国際化教育及び留学生教育に係る調査研究」の一部のパイロット事業として位置づけ、国際センターが経費を支出することを認めて頂きました。

(1) 上位目的

「教養教育は単に専門教育のための基礎としてだけではなく、専門的な知識をより広い知見のもとで深めるために、高年次に学習させる科目も開講される。」との教養教育の位置づけに該当し、かつ、それに基づく５項目の「教養教育の具体的な目標」のうち、次のものに寄与する科目です。

- 専門科目の学習により得られた専門的な知識を、より広い視野や知見の下で位置づけ、意味づける力を育成すること
- 大学院教育に接続する学部教育の中で、自ら学ぶ学習能力を育成すること
- 自らの心身の健康を管理し、感性と精神を高め、社会や世界に貢献できる経験や意欲を育成すること

(2) 成果

学生たちが最終的に作成・提出したペーパーは、大変意欲的に書かれたもので、この授業のインパクトがいかに大きかったかを示すものでした。また、12 月、この授業について学生から取材したいとの申し入れが新潟日報社からあり、学生の１人がこれに応じた結果、同社の 2005 年 12 月 21 日付け夕刊に大きな写真入りで掲載されました。「ありのままの姿知って」、「便利な生活と豊かさは違う」というその見出しは、この授業が目的を達したことを示すと同時に、学生に対するこの授業のインパクトをよく捉えています。

(3) 課題：報告会開催の重要性

この種の授業は、それほど多くの学生が参加できる訳ではありません。これは、学生の自己負担額が大きいこと、多くの学生の参加の場合のリスク管理は大学として不可能であることなどによるものです。他方で、今回の授業がよく示したとおり、この種の授業が学生に与えるインパクトには相当に大きいものがあり、また、学生本人の負担が大きい一方で、大学としても、多くの学生の支払った授業料を少数の学生のために投じているという事実もあります。そのため、この授業の成果を他の学生と共有し、また、スタディ・ツアー型授業についての学内における理解を深めるため、学生、教員、事務職員等を対象にした報告会を実施することが重要であり、それを実施する予定です。

なお、それに先立ち、この授業の実施に協力してくれた新潟マダガスカル友の会の依頼により、市民向けの報告会を 2005 年 12 月 18 日（日）に新潟市内で開催し、学生たちも任意で参加し、報告し、それは大変好評でした。

(4) 課題：スタディ・ツアー型授業の需要とそれへの対応

他大学での経験から、引率者１人が安全対策等のできる限界は10人と言われていることから、定員は 10 人とし、７人が参加の意志表明をしました。しかし、最終的な履修者数は 2 名となってしまいました。その事情については、食費を含めると、自己負担総額がおよそ30万円に及ぶことから（うち航空運賃が約20万円)、学生たちが、自分たちの関心を満たしてくれる投資効果に見合った授業になるかどうかの評価に慎重になったことがあるように思われます。残った２名は、担当教員が経験してきた政府、政府間機関或いは国際協力分野で活動することに関心があるのに対し、他の学生は、必ずしも政府、政府間機関での実務に関わることに関心があった訳ではなく、開発途上国の貧困等を実際に見て、自分に何ができるかを考えることに関心があったと見られます。そのため、政府機関や政府間機関等への訪問は無く、貧困層のいる村などの訪問がほとんどを占めるようなものに投資するほうが賢明であると判断した様子です。

その後学生から 2006 年度の開講についての問い合わせがあることや NGO 等主催のスタディ・ツアーに参加する学生がいる実態をも考慮すれば尚更、授業としてのスタディ・ツアーに対しては、本学にも一定数の潜在ニーズがあることがわかります。しかも、そのような授業は、専門科目の学習により得られた専門的な知識を、より広い視野や知見の下で位置づけ、意味づける力を育成すること、大学院教育に接続する学部教育の中で、自ら学ぶ学習能力を育成すること、自らの心身の健康を管理し、感性と精神を高め、社会や世界に貢献できる経験や意欲を育成することという、教養に関する科目の目的に大いに寄与するものです。明治学院大学で「始めた際は、若手教員、YMCA、NHK、JETRO 等から来た教員の意見が大きかった。実施してみて、各教員の感じた手ごたえが大きかった。」とも報告されています。従って、この種の授業を他にも実施することが望まれます。

その場合、ニーズが大きいのは、筆者の実施したような政策研究の枠組のものよりは、一部の私立大学で行っているような、農家に泊まり込んで農民の生活を体験したり、孤児院に行って孤児の世話をしたりするといった体験型の授業です。筆者自身は、専門が異なるので、そのような授業を的確に実施し難いですが、それぞれの学部でそれぞれの具体的研究テーマとの関係で実施できる人材はいると思われます。しかも、その際に共通に問題になり得る安全管理については、今回の実施、とりわけその中で作成したリスク管理計画が大いに役立つと考えられます。従って、大学として実施経費を配分すること等の措置を講じて、それぞれ内容の異なるスタディ・ツアー型授業の実現を図ることが期待されます。そうなって初めて、私の授業が「パイロット授業」としての意味を十分に持つことにもなります。

現地訪問日程

9月16日（金）	16:30 新潟発、ソウル乗り換え、バンコク乗り換え
17日（土）	6:00 アンタナナリボ着
18日（日）	チンバザザ動植物園（アンタナナリボ市内）
19日（月）	国家環境委員会事務局、UNICEF
20日（火）	日本大使館、JICA、環境事務次官、UNDP、自然保護区管理協会（特殊法人）
21日（水）	UNDP/GEF 小規模無償資金協力プロジェクト訪問（自然林保護と隣接地の農民収入増加策）（首都から 90 キロの農村）
22日（木）	青年海外協力隊員（小学校体育指導）訪問（首都から 30 キロの農村）
23日（金）	米国 NGO 訪問、学生との意見交換会、旧王宮（世界遺産のアンブヒマンガ）
24日（土）	アンダシベ・マンタディア国立公園
25日（日）	市内の旧王宮
26日（月）	7:50 アンタナナリボ発、21:00 バンコク着

27 日（火）	国連環境計画アジア・太平洋地域事務所、FAO アジア・太平洋地域事務所
28 日（水）	タイ環境・自然資源省環境研究研修センター
29 日（木）	1:20 バンコク発、ソウル乗り換え、14:30 新潟着

「開発途上国の環境と開発：事例研究」でのマダガスカル環境事務次官（中央）訪問

現地 NGO が実施する国連開発計画管理の地球環境ファシリティー（GEF）のプロジェクト見学

左記の見学の際の町の小さな食堂での一般的なマダガスカルの食事

マダガスカル・ガールスカウト連盟主催で、地元の大学生等との意見交換会

国立公園訪問。国立公園を管理している特殊法人は、入園料収入の半分を地元に還元しており、そのことから、愛・地球博で、先進的取組として表彰された。

帰路のタイ環境・自然資源省環境研究・研修センター見学（日本の ODA 協力の成功事例）

5. その他

次のところにウェブサイトを設け、授業についての詳細情報の提供等を行っています。

http://www.isc.niigata-u.ac.jp/~miyatah/